

奈良大文化財学科の五年間

白石 太一郎

1

最初から予想していたことであるが、本当にあつという間の短い5年間であった。6年前の平成15年の早春のことと記憶するが、東京国立博物館で開かれた東大寺山古墳出土の中平銘大刀の修理・模造のための調査検討会のあと、東野治之先生から歴博（国立歴史民俗博物館）退職後、奈良大学の文化財学科へ来ないかとお誘いを受けた。翌平成16年の3月で、設立準備室以来26年間勤めた歴博を退職することが決まっていたが、私自身も、また家内も歴博のある城下町の佐倉が大いに気にいっており、退職後も二人でこの地に永住する覚悟を決めていた。他からのお話ならすぐお断りしただろうが、奈良大となると話は別で、真剣に考えさせていただき旨お答えした。

奈良、すなわち大和は河内とともに私の専門的なフィールドの地であり、特に奈良は高校生時代以来、奈良県立橿原考古学研究所時代の10年間を含めて、歩き回った懐かしいところである。さらに奈良大の文化財学科は、優れた考古学専攻の卒業生を数多く全国各地に送り出しており、その教育研究には大いに敬服していた。また私にとっても、家内にとっても関西は故郷でもある。その後家内とも相談し、また大阪で水野正好先生ともお会いして奈良大の現状についていろいろお話を伺ったが、佐倉永住の覚悟を翻すのにそれほど時間はかからなかった。

2

歴博在職中から、東大、國學院、専修、学習院などで、学部の考古学概論や大学院の考古学特講・演習などを、多くは隔年で受持っていたので、奈良大での講義や演習はその延長ということで特に苦労はなかった。また学部の「考古学概論」は受講生諸君が、私が教えていた関東の大学の学生たちに比べても非常に熱心で、準備は大変だが大いにやりがいのある授業であった。これは最初から考古学をやることを目指して奈良大を選んだ学生が少なくないからだろう。また学部や大学院の演習での学生諸君との議論も楽しかった。その中で学生諸君から教えられ、学んだことも決して少なくない。

2年目から始まった通信制の「考古学概論」のレポートの添削は、数が多くて大変だった。通学生の場合は、気付いたことは口頭で伝えられるが、通信制の場合はすべて文章化しなければならず、しかも真剣な受講者が多くていい加減な対応はできないからである。また卒業論文の指導も、これまた人数が多くて苦労した。私の場合はテキスト科目の担当であったが、スクーリング担当で大和・河内の古墳や寺院跡などの現地踏査などができればさぞ面白かっただろうと、少し残念な気がしないでもない。

5年間を振り返って、学生諸君に申し訳なく思うことは、私自身が少し忙しすぎて、ゆとりをもって学生諸君と接することができなかったことである。私が、奈良大がこれほどまでに多忙だとは思わずに学外の委員などを引受けすぎているせいもあるが、通信制の負担などで大学の仕事が忙しすぎたこともまた否定できない。研究はもちろんであるが、教育にも“ゆとり”が大切である。これはひとり奈良大

学だけの問題ではなく、国公私立を問わずほとんどの大学でも同じ問題を抱えているようである。こんな事で日本の高等教育や学術研究は本当に大丈夫なのだろうか、との思いを深くするこの頃である。最後の教授会でのご挨拶でも申し上げたが、奈良大でも何とか先生方で智恵を出し合って、組織や雑務の簡素化、カリキュラムの効率化の方策を考えられ、古都奈良にある大学にふさわしいゆとりのある教育研究環境を取り戻していただきたい。それが将来の奈良大の発展につながるものであることを信じて疑わない。

3

研究面では、もう自分には若い先生方のように精緻な研究はできないことは始めから承知していた。ただ奈良大にお世話になることになったその年の初めから、大阪府立近つ飛鳥博物館の仕事を手伝うことになった。この博物館は古市古墳群・百舌鳥古墳群・磯長谷古墳群というわが国でも有数の大古墳群を抱える大阪府が、古墳とその時代に関する専門博物館として設立したユニークな博物館である。そのこともあって、以前から是非やりたかった古市・百舌鳥古墳群の都市化以前の地形図の作成事業を計画した。

この両古墳群は、大都市大阪の近郊ということもあって戦後早くから古墳の周辺が市街地化し、古墳群の本来の地形や環境がよくわからなくなってしまっている。ただ、昭和21年に米軍が撮影した航空写真があり、少し経費はかかるがこの航空写真をもとに大縮尺の旧地形図の作成が可能なのである。何とか開発以前の両古墳群の地形図を作成して今後の研究に備えたいと考え、奈良大の先生方や大阪の古墳時代研究者の方々と相談したところ、皆さん大賛成で、早速共同研究のチームを組織し、奈良大から科学研究費を申請することにした。幸い平成17年度から3年間にわたって「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」と題した研究に科研費の交付が認められ、計画を実施することができた。

この共同研究には、奈良大の酒井龍一、植野浩三、千田嘉博、大阪大学の福永伸哉、大阪市大の岸本直文さんらの面々、さらに大阪府の玉井功、一瀬和夫（のち京都橘大学へ移動）、堺市の十河良和、羽曳野市の河内一浩、藤井寺市の天野末喜、柏原市の安村俊史、太子町の池田貴則さんら各教育委員会で古墳群の調査に携わってこられた研究者の方々、さらに宮内庁書陵部の加藤一郎さんにも加わっていただいた。また地理学の日下雅義先生や奈良大の地理学科でGISの研究を進めておられる碓井照子先生にも手伝っていただくことができた。

そして単に都市化以前の地図作成だけではなく、戦後両古墳群の巨大な前方後円墳の周辺部の開発に先立って大阪府や各教育委員会が困難な条件の中で実施してきた発掘調査、さらに宮内庁書陵部が陵墓の保全工事に先立って実施された発掘調査の調査地点やその成果をGISを利用して地形図に記録するとともに、そのデータベースを作成することにした。またこうした両古墳群の調査を担当される大阪府や各市の研究者の方々が、意欲的に進めてこられた両古墳群出土の円筒埴輪の編年研究の到達点をも総括していただくことができた。その結果、両古墳群の形成過程についてはほぼ共通理解をえることができたものと考えている。これは、両古墳群を日本古代史の上に正しく位置づけ、ヤマト王権の実像を解明する上に大きな意味を持つものである。この報告書は平成20年3月に刊行したが、両古墳群に関する戦後の調査・研究を総括したものとして高い評価をいただくことができた。

たまたまこの共同研究をやっていた時期、まず堺市が、続いて大阪府と羽曳野・藤井寺両市が、百舌鳥・古市両古墳群の世界遺産化を目指した運動を始められた。そして平成20年、文化庁は文化審議会に

世界遺産特別委員会を組織し、各地の自治体から出された数多くの提案の中から、世界遺産の国内暫定リストに登載すべき候補の一つとして大阪府とこれら3市が提案していた「百舌鳥・古市古墳群」を選定された。両古墳群については、主たる構成資産が陵墓として宮内庁の管理になっていることや、周辺がすでに著しく都市化しているなど世界遺産登録には大きな課題が残されており、特別委員会でも判断に苦慮されたようである。ただこの審議の中で私たちのまとめた科研費研究の報告書が、一定の役割を果たしたことを、あとになって特別委員会の委員長の藤本強さん（東大名誉教授）から教えられた。この共同研究は世界遺産化運動の動きとはまったく関係なしに始めたものであるが、このことは私にとっては何よりも嬉しいことである。共同研究に参加いただいた方々に厚くお礼申し上げたい。またこの研究を支えてくれた奈良大大学院の西本和哉、同志社大大学院の藤本悠両君にも深く感謝する。両君がこの研究からえたものも決して少なくなかったと思われる。

4

一方、個人研究として思い出に残るのは、近世大名墓所の研究（？）である。各地の大名が徳川將軍家を中心に幕藩体制を形成していた江戸時代は、列島各地の首長たちが畿内の大和・河内の大首長、即ち大王を中心に首長連合を形成していた古墳時代とよく似たところがある。この首長連合の政治秩序と密接な関連をもって造営されたと想定される古墳の本質を考えるために何がしかのヒントがえられるのではないかとの思いもあって、30年ほど前から各地に出かける際にはその地の大名墓所を見学するように努めてきた。近世大名墓は、古墳とはまた違ったかたちで豪壮なものが多く、次第に大きな関心を抱くようになっていた。ただそれは研究といえるようなものではなく、あくまでも一種の趣味にすぎなかった。

たまたま、私が奈良大に着任して間もない頃、金沢市の教育委員会の方が訪ねてこられた。金沢市の野田山には加賀藩主前田家の墓所があるが、そこを国の史跡に指定してもらうための詳細調査を計画しているので、その指導委員会に参加してくれないかという依頼であった。野田山の前田家墓所は、利家以降代々の藩主が一辺20メートル近い方形の墳丘をもつ墓を営んだ特異なもので、以前から大きな関心を持っていたので喜んで調査に加わらせてもらうことにした。この調査では、現地調査を担当された金沢市の埋蔵文化財センターの方々や金沢の先生方からいろいろ教えられ、大いに勉強させていただいた。ところが調査最終段階の報告書作成の段階になり、文化庁の要請もあって、誰かが全国の近世大名墓所の中での前田家野田山墓所の位置づけについて書かなければならなくなった。金沢の先生方は前田家の事例には詳しいが、各地の大名墓を広く見ておられるわけではない。こうした経緯から、近世史にはまったく素人の私がこの部分の報告を書かなければならなくなった。

そのため、大きな大名墓所でまだ見ていないものや、早くに見て印象の薄れているものについて、まさに泥縄で見て回り、なんとか報告書の原稿を書きあげることができた。おかげでこの間、以前から訪ねたいと思っていた盛岡の南部家、弘前の津軽家、松前の松前家墓所など北辺の大名墓をはじめ、各地のまだ見ていなかった大名墓所を見学することが出来た。こうしてあらためて近世の大名墓所を大観してみると、以前から気付いていたことではあるが、それがきわめて多様なあり方を示しており、どれ一つとして同じものがみられないことにあらためて注意させられた。その点きわめて画一的な内容をもつ古墳時代の古墳とはまったくそのあり方が異なるのである。

ここ3年間ほどの間、少し時間をかけて各地の大名墓を集中的にみてまわることが出来たのは幸いで

あった。奈良大の個人研究費のうち、旅費の大半はこのために使わせていただいた。それは40年あまり一貫して追求してきた首長連合の政治体制・政治秩序と不可分な古墳の本質を、あらためて確認させてくれるものであった。

いずれにしても大名家墓所のあり方が、古墳の本質を正しく理解するのにきわめて重要なヒントを与えてくれる興味深い比較材料であることは疑いない。本年1月21日の最終講義にこのテーマを取り上げたのは、まさにこのためにほかならない。

5

この5年間に奈良大でやらせてもらったことで、いま一つ思い出に残るのは、卒業生の方など5人の方に博士号を取っていただいたことである。その内訳は、初期の卒業生の論文博士が3名、課程博士が1名、それに奈良大の卒業ではないが奈良県立橿原考古学研究所の今尾文昭さんの論文博士の合計5名である。もちろんこれは私一人でやったことではなく、いずれも文化財学科の先生方とともに審査を担当したものである。幸いそれらのテーマは、古墳～飛鳥時代に関するもののほかは、中世墳墓や古代末～中世の瓦器生産を課題とするもので、すべて私がかつて手がけた関心のあるものであり、あらためて大いに勉強させてもらった。奈良大に来る以前にも何人かの博士論文の審査に関わったが、それらの審査調書と比較すると奈良大のそれは伝統的(?)にきわめて分量が多く、その作成には大いに苦勞させられた。ただそれも今となっては楽しい思い出である。

また、後の3年間は図書館長を仰せつかった。館のスタッフがきわめて優秀で、そのお陰で何とか務めおおせることができた。奈良大の図書館は蔵書も充実しており、学生諸君の利用率などもきわめて高い。朝日新聞社の朝日ムックの大学ランキングでは、関西の私立大学の中で少なくとも図書館だけは毎年きわめて高いランクに位置づけられている。まったく名前だけの館長であったが、このすばらしい大学図書館の館長を勤めさせていただいたことを嬉しく、誇りに思っている。

奈良大の在職期間はわずか5年間という本当に短い間であったが、私にとっては人生の終わりに近いこの時期に、きわめて多彩な彩りの何頁かを生涯の記録に書き加えることが出来て、大変幸せであったと思っている。お世話になった先生方や敬老精神でやさしく接してくれた学生諸君に厚くお礼申し上げたい。